「この文庫書き下ろし時代小説がすごい！」
ベストシリーズ第１位
『孤闘～立花宗茂』で第16回中山義秀文学賞を受賞

庶民の抵抗　織り込んで

異色の歯科医師・上田秀人氏に聞く時代小説の世界

時代小説界のなかで一人の作家が人気を集めている。２００９年に「この文庫書き下ろし時代小説がすごい！」ベストシリーズ第1位に選ばれ、２０１０年には新鋭・気鋭の優れた歴史・時代小説に贈られる第16回中山義秀文学賞を受賞した。著者は八尾市で開業する歯科医師の上田秀人先生（54）だ。異色の歯科医師・上田先生に時代小説への思いを聞いた。（聞き手・小澤力理事長）

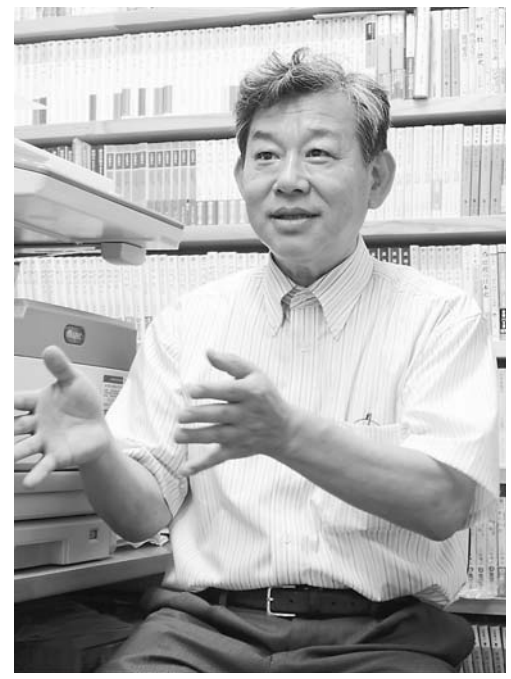
時代小説家
歯科医師　上田秀人氏

子どもに仕事見せたい甘い考えで小説の道に

――上田先生は子どもの頃から歴史物をよく読まれていたのですか。

そうですね。もう亡くなりましたが、親父はＮＨＫの大河ドラマが大好きで、必ず原作を買っていました。ただ、親父は、テレビはよく見るのですが、原作本は全く読みませんでした。僕が小学生の頃、内科の開業医の母親は忙しく、薬剤師で公務員の父も一日中働いていました。８歳年上の兄はもう高校生でしたから、気がついたら絶えず一人で、家には遊んでくれる人がいないのです。そうなると本を読むしかない。手当たり次第に読んで、小学生ぐらいで『天と地と』（海音寺潮五郎著）や『勝海舟』（子母沢寛著）など、べったり時代物にはまっていましたね。

中学の時はＳＦしか読んでいません。高校に入ったら推理小説に移って、日本の作品からコナン・ドイルなどの海外の名作まで全部読んだりして、本というものが身近過ぎたのでしょうね。



理事長・小澤　力氏

――本格的に執筆活動を始めようと思ったきっかけなどありましたら教えてください。

僕の親父は大阪市の大病院の薬剤師やったんですが、保健所勤務になる前に1日だけ僕を仕事場に連れて行きよったんです。自分の仕事を最後に見せたかったんだろうと思います。親父の仕事風景を半日ぐらい見たことが僕の心に重く残っていたので、自分の子どもにも同じ経験をさせたいと思っていました。

ところが歯医者は患者さんの口を開けて、治療結果を見せるわけにはいかない。だったら何が見せられるんだと考えました。そこで、小説だったらなんとかなるじゃないかと、ものすごい甘い考えでしたね。

タイミングよく日本推理作家協会の山村正夫会長が私塾をもって、弟子を育てているということを聞いたので、手紙を書いて「入れてください」と申し出ました。

あかんかったらやめる「最後」の作品が評価

――先生の時代小説にはミステリーの要素も散りばめられていますね。

そうですね。もともと推理小説を書いていましたから。歯医者でしたので、腐乱死体の歯型で調合していくような原稿を書いていましたが、全然、評判が良くありませんでした。うちの師匠はいいと思うとパッと編集者に渡してくれるのです。しかし、2年ぐらいかかっても全然ダメで、「これであかんかったらやめよう」と思って書いたのが、坂本龍馬の死の謎に迫るという時代小説です。

大阪歯科大学の図書館に坂本龍馬の「死体検案書」のコピーがあったのを学生時代に見たのを覚えていたのです。その時、「脳をこれだけ斬られて、あんだけしゃべれるのかな？」ということが不思議で仕方がありませんでした。そこに着目して執筆した原稿が師匠に受けまして、角川の編集者に渡りました。

師匠から「しばらくこれで行きなさい」と言われ、1997年に『身代わり吉右衛門』で第20回小説クラブ新人賞佳作に選ばれ、デビューしました。

――戦国時代よりも江戸時代を題材にしたものが多いですね。特に11代～13代将軍あたりでしょうか。

いま、その時代がお仕事としていただいて、執筆しているのが多いのですが、本来はもうちょっと前半が好きなんです。3代から5代ぐらい。平和になって経済が台頭してくる頃で、武家が弱くなり、商家が強くなってくる頃が世相としておもしろいと思っています。（中山義秀文学賞を受賞した）『孤闘～立花宗茂』だけは私の希望で書きましたけど、あとは出版社から「○○を書いてみませんか」と提案されて執筆することが多いです。

江戸時代の文庫物は基本的に自分の好きにさせてもらっています。『奥右筆秘帳』シリーズは5代将軍の時に設けられました。『勘定吟味役』シリーズは6代将軍以降です。あまり他の人が書かないですから、書き手にとって都合のいい時代ですよね。

武家の話だけだと偏る官を相手に知恵を絞る

――今、どれぐらいのペースで執筆活動をされているのでしょうか。出版社からの依頼も多数ありますのでハードでしょうね。

ここ何年間か休ませてもらったことがありません。今は1日原稿用紙最低22枚というのをノルマにしています。朝は診療所で8時半ごろから診療開始の9時半まで執筆して、診療時間中やお昼休みも時間が許せば机に向かいます。以前は午後8時まで診療していましたが、7時半に変更しました。そこから1時間ほど診療所で書き、帰って家族で団らんした後、10時ごろから執筆に取りかかり、深夜2時ごろ就寝す

八尾市内の診療所でインタビューを受ける
上田秀人氏（左）

うえだ・ひでと　1959年大阪府生まれ。大阪歯科大学卒業。97年小説ＣＬＵＢ新人賞佳作。歴史知識に裏打ちされた骨太の作風で注目を集める。『孤闘　立花宗茂』（中央公論新社）で第16回中山義秀文学賞を受賞。講談社創業１００周年書き下ろし作品『天主信長　我こそ天下なり』も大胆な解釈で高い評価を受ける。『奥右筆秘帳』シリーズでは、「この文庫書き下ろし時代小説がすごい！」（宝島社）でベストシリーズ第1位に輝いた。八尾市開業歯科医師。